

## 論文審査の要旨

報告番号	①・乙 第 2768 号	氏 名	瀧田 寛子
論文審査担当者	主査 板橋 家頭夫 副査 土岐 彰 副査 小風 暁		
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>妊娠初期および中期精密超音波検査の有用性を昭和大学病院で妊娠初期から妊婦管理した単胎妊娠の 2028 例を対象に前方視的に検討した。その結果、妊娠初期に 28 例(1.4%)に胎児異常を認め、そのうち 12 例は染色体異常、3 例は無頭蓋症などであり、人工流産となった。3 例は自然流産した。8 例は胎児浮腫(腹水・胸水含む)の所見がその後に消失した。妊娠中期に新たに 10 例(0.5%)に異常所見を認めた。出生後、18 例に新たに異常所見(心室中隔欠損症 8 例、心房中隔欠損症 1 例、副耳 2 例など)を確認したが、新生児期に手術が必要な症例は鎖肛と合指症の 2 症例であり、出生直後から集中管理が必要な症例の出生前診断は行われていた。初期精密超音波検査で胎児の致死的な形態異常や染色体疾患と関連する所見が検出された。また、中期精密超音波検査を組み合わせることで、胎児異常所見の検出精度を向上させることができた。この研究は、初期精密超音波検査によって致死的な疾患などを早期診断する精度を、我が国で前方視的に大規模に検討した初めての報告である。</p> <p>論文題名 : Usefulness of antenatal ultrasound fetal morphological assessments in the first and second trimester: A study at a single Japanese university hospital</p> <p>(妊娠初期・中期胎児精密超音波検査の有用性 : 日本の 1 大学病院における検討)</p> <p>掲載雑誌名 : Journal of Medical Ultrasonics 2015 掲載予定</p>			

(主査が記載、500 字以内)